論　文　の　内　容　の　要　旨

論文題目　**台湾語と普通話の方向表現に関する対照研究**
**—“來”“去”を中心に、日本語との対照も兼ねて—**

氏　名　　陳　　順　益

本研究は台湾語と普通話における方向表現、特に方向補語と呼ばれるカテゴリーについて、両言語における統語上及び意味上の差異を指摘し、解明を試みたものである。

本研究は七つの章に分かれ、本論は第２章から第５章までである。

序章では、普通話、台湾語、台湾華語などの用語について定義をし、台湾語を閩南語の下位範疇に分類した。第１章は研究の動機、目的、アプローチについて紹介した。

本論の第２章では、方向補語 VD 構造全体について、普通話と台湾語における構造上の差異を指摘し、その原因を究明し、それぞれの VD 構造のメカニズムを明らかにした。そして従来殆ど言及されることのなかった台湾語 VD 構造の特殊音韻現象(2.4)を指摘し、独自の解釈を試みた。さらに x(詳細は後述)となる要素を決め、要素の性質をイメージスキーマで分析した。

第３章、第４章では、それぞれ y(詳細は後述)となる要素“去”、“來”について、台湾語と普通話における統語上、意味上の差異を指摘し、差異の原因を明らかにした。そして従来あまり研究されることのなかった台湾語の“去 hō͘”(3.4)と“來去 lâikhì”(4.4)について、先行研究の問題点を指摘し、そのメカニズムを明らかにした。

第５章ではさらにダイクシス及び結果性の視点から台湾語と普通話の“來”“去”における根本的な差異を指摘し、その原因を明らかにした。

本研究でいう方向補語(D)とは Talmy の術語で言えば衛星(satellite)に当たるものである。普通話や台湾語の場合ではさらに経路を表す Dp(path directionals、本研究では x と略す)と直示移動(deictic motion)を表す Dd (deictic directionals、本研究では y と略す)に分けることがで

きる。本研究では y つまり Dd である“來”“去”を中心に議論を展開した。何故かというと、台湾語の[動詞＋方向補語]構造(本研究では VD 構造と呼ぶ)において y が欠かせない要素であるからである。

本研究では以下のことがらが明らかになった。

(1)本研究では、まず普通話や台湾語の言語事実に基づいて VD 構造の定義をし、この定義に基づいて方向補語となる x の六つの条件を決め、x となる要素を決めた(表 2.1.2-2,2.1.2-3)。この六つの条件にもとづき、本研究では“到 dào(遘 kàu)”と“开 kāi(開 khui)”を x から外し、普通話の x の集合を{上,下,进,出,回,过,起}、台湾語の x の集合を{起,落,入,出,轉,過}と規定した。さらに、y になる要素“來”“去”の他に台湾語の特別用法“來去 lâikhì”を台湾語の第三の y として加えた。このような分類を試みたのは、台湾語の“來去 lâikhì”は一人称しか主語に使わないという制限があるものの、意味上も、統語上も方向補語として相応しいためである。本研究で取りあげた普通話と台湾語の方向補語は次の通りである。

普通話の方向補語　(=表 2.1.2-5)

| x(Dp) | 上 shàng | 下 xià | 进 jìn | 出 chū | 回 huí | 过 guò | 起 qǐ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| y(Dd) | 来 | 来 | 来 | 来 | 来 | 来 | 来 |
| | 去 | 去 | 去 | 去 | 去 | 去 | φ |

台湾語の方向補語　(=表 2.1.2-6)

| x(Dp) | 起 khí | 落 lọh | 入 jiṭp | 出 chhut | 轉 tńg | 過 kòe |
|---|---|---|---|---|---|---|
| y(Dd) | 來 | 來 | 來 | 來 | 來 | 來 |
| | 去 | 去 | 去 | 去 | 去 | 去 |
| | 來去 | 來去 | 來去 | 來去 | 來去 | 來去 |

(2)次に普通話と台湾語の VD 構造における統語上の差異を指摘し、そのメカニズムを明らかにした。本研究の調査によれば、普通話と台湾語 VD 構造が“宾语”を取る場合(動詞の

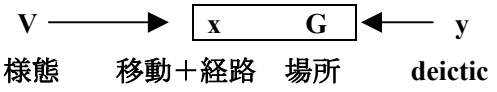
後ろに場所名詞や動作の受け手を表す名詞句が置かれる場合)、統語上大きな差異が存在している。このような差異が生じた最大の原因は普通話と台湾語の VD 構造が“**宾语**”(例:場所詞)と接続する時の基本語順によるものであることが分かった。

**基本語順**

**普通話：VxG(=場所詞)y**

**台湾語：Vxy G(=場所詞)**

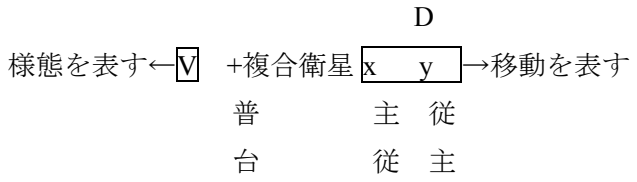
**普通語 VD 構造のメカニズム　（⟶ は追加情報を表す）**




**台湾語 VD 構造のメカニズム**

普通話において x は必須要素であり、V と y は x の追加情報となる。これに対し台湾語では y が必須要素であり、V と x は y の追加情報となる(詳細は 2.1.3 を参照)。

上の分析をさらに Talmy の理論に当てはめた結果、普通話と台湾語における方向補語 VD 構造の構造上の差異は複合衛星 x,y の主従関係にあることが明らかになった。




**普通話：x は主であり、y は従である。　　（主＝必須要素、従＝追加情報）**

**台湾語：x は従であり、y は主である。**

“**宾语**”と接続する場合には、基本的に主要要素の後ろに来る。従属要素は追加情報であるため、場合によっては省略しても良い。但し、x が省略される場合、衛星として移動を表す機能は基本的に y によって表される。x,y は主従関係にあるが、ともに複合衛星の一員として方向補語構文の移動を表している。このような分析には先行研究においてきれいに整理されていない VD 構造の y(=“来、去”)に適切な定義を行うことが可能になるという利点がある(詳細は 2.1.4 を参照)。

なお、方向補語 D の後ろに来る場所詞 G について、普通話は x の後ろに来るため、x の性質によって場所詞が起点(source,例:“出”)を表したり、着点(goal,例:“上,进”)を表したり、中間経路(route,例:“过”)を表したりしている。一方、台湾語の場所詞は y の後ろに来るため、場所詞 G は常に着点(goal)に限られる(2.2.1-2.2.3)。

(3)本研究の調査により、台湾語の“來 lâi”“去 khì”を伴う方向表現(e.g.動詞“去 khì”の用法や方向補語“～來/去”の用法など)では、後ろに他の要素が来る場合、動詞または VD 構造の部分の声調が従来の声調交替規則から逸脱し、調値が全体に高くなる傾向にあることが明らかになった。“來 lâi”“去 khì”の後ろの要素の基本調が(陰)上声“起 khí、轉 tńg”及び陰去“過 kòe”、陰入“出 chhut”の陰調の場合、全体の声調が明らかに高くなり、第一声の陰平(高平調、調値[55])と同程度の高さに変化する。一方、基本調が陽平“來 lâi”及び陽入“入 jı̍p、落 lo̍h”などの陽調の場合、明らかな変化は見られないが、変調後の調値より若干高くなることが認められる(p.73 を参照)。動詞“去 khì”が高くなる現象については従来の指摘のような「再変調」にとどまらず、“去”のみではなく、“來/去”を伴う方向表現という範疇全体にこの現象が見られると指摘したのは本研究が初めてである。また、“去 khì”が高くなる現象について、先行研究では「再変調」と説明されることが多いが、再変調では説明できない現象も数多くあるため、本研究では再変調説を認めず、独自の解釈を試みた。これによって、従来台湾語の学習者や教師にとって難題であった所謂「á 前の特殊変調」現象についても同じ解釈でもうまく説明できるようになった(詳細は 2.4 を参照)。

(4)台湾語には“khì hō͘”という特別な用法がある。“khì”の語源について大陸の文献では“乞 khit”と分析しているが、台湾や日本の文献では“去 khì”と分析している点で異なる。本研究では音韻、統語、意味各方面から“khì hō͘”を分析し、“khì”の語源は“乞 khit”であることを認めながら、“去 hō͘”の用法は既に台湾において定着しているため、“去 hō͘”の用法を台湾語特有の表現として認めるべきだと主張した。最後には何故台湾人や日本の研究者が“去”を用いるかその動機付けを推測した。“去 hō͘”の用法は単なる誤用とは説明できず、それが台湾語において定着しているのは台湾人がそれを認知する動機付けが十分にあるためと考えられる。

さらに 4.3.2 で述べたように、台湾語には“去 hō͘”の反対用法として“來 hō͘”という用法があり、そして“去”“來”の後ろに場所詞を付けて[去+場所詞+hō͘] [來+場所詞+hō͘]とする用法も可能であるため、“khì”の語源は“去 khì”である可能性も全くないわけではないと推測した。つまり、本研究では、現代台湾語における“khì hō͘”の“khì”の語源は二つのルーツがあると推測したのである。一つは“乞 khit”である。通時的視点そして音韻、統語、意味各方面から立証できる。現在福州語など他の閩語にもまだ“乞 khit”の用法が残されていることからも証明される。もう一つは“去 khì”である。“去 hō͘”の反

対用法“來 hō͘”があり、そして“去”“來”の後ろに場所詞を付けることが可能であることから推測できる(詳細は 3.4、4.3.2 を参照)。

(5)従来あまり研究されてこなかった“來去 lâikhì”について、本研究は先行研究の問題点を指摘しながら音韻、統語、意味の各方面から分析し、そのメカニズムを明らかにした。“來去 lâikhì”は口語では“去 khì”の子音の部分がよく脱落し、“來-i lâi-i”に聞こえるため、“來 lâi”とよく間違われる。しかし、“來去 lâikhì”が表している移動は“來 lâi”「来る」ではなく、“去 khì”「行く」であるため、“來 lâi”や“去 khì”と区別しなければならない。“來去 lâikhì”には(i)基本的に主語は第一人称の単数もしくは複数に限る。(ii)未来のことのみ表し、過去のことを表すことができない。(iii)具体的な空間移動しか表さず、抽象的な意味を表すことができないという制限はあるが、“來 lâi”や“去 khì”と同様に全ての x となる要素と接続し、移動を表すことが可能であり、VD 構造になることも可能であるため、本研究は“來去 lâikhì”を台湾語 VD 構造の第三の y として位置づけた(詳細は 4.4 を参照)。